



Special to the Newsletter

新教皇フランシスコの就任の 歴史的瞬間に遭遇して

川村 信三

3月13日、午後7時5分。ローマにある600余りの教会堂の鐘がバチカンのサンピエトロ大聖堂の鐘の音につられて次々と鳴り響き始めた。この「新教皇選出」の歴史的瞬間を、私はローマで数十人の学生とともに体験した。実は、その2日まえからサンピエトロ広場で、教皇選出を知らせる「煙」を2度、目撃していた。そんな興奮と驚きのなかでの、教皇フランシスコの登場、しかも修道会出身者としては200年ぶり、そしてイエズス会出身者としては歴代初という、なんとも例外づくしの選出に、ローマ中が興奮している様子を実際に体感したことに感謝している。

私は、上智大学の教員をしているが、イエズス会員でもある。専門はキリスト教史、とくに16世紀から1世紀にわたっておこなわれたイエズス会の日本宣教をテーマとしている。今回、ローマに赴いたのは、上智大学の100周年記念行事の一環として、在校生、卒業生とともに、教皇に特別謁見するためであった。1913年、時の教皇ピウス10世より、東京におけるカトリック大学設立の要請がきっかけとなり、実際にこのような大学になったことの御礼である。昨年秋より、総勢80名の団体を率いてのローマ入りの計画をたてた。3月13日に教皇ベネディクト16世の謁見会場で特別のメッセージがいただけるということで参加者がすぐに集まった。ところが、2月11日、ベネディクト16世が突如「退位」を表明された。2月28日をもって教皇は退位し、その空位期間、後継者を選ぶためのコンクラーベの時期を迎えることになる。バチカン関係者の予測では通常どおりなら、3週間、つまり3月24日ごろまでは新教皇の選出はないと言われていた。つまり私たちの「返礼」巡礼団の目的は宙に浮く形となってしまった。

しかし、すこし気もちなおし、ローマ訪問の計画自体を変更せずにいたのは、もしや、私たちの訪問時期に、新教皇の選出があるかもしれないとの一縷の望みがあったからである。コンクラーベ期間中のローマに足を踏み入れることなど、どんなに計画してもなかなかめぐってくるチャンスではない。今回のコンクラーベは、教皇の逝去後におこなわれるものではない。慣例上9日間の喪に服する期間は省略される。しかも、いつも時間のかかる枢機卿たちのローマ到着も余裕をもって準備できる。とすると、私の計算では、コンクラーベは3月9日頃はじまり、3月15日までには新教皇選出があるだろう。3月11日から14日にローマに滞在することになっていた私たちの巡礼団は、とにかくシスターナ礼拝堂から立ちのぼる「煙」を何度か目撃する可能性があるとの予測をたてた。そして、3月6日ミラノのマルペンサ空港からヴェネチア、フィレンツェ、アッシジを経由し、3月11日の朝、ローマに入った。

イタリアのメディアは教皇選挙について興味を示しているものの、それほど大きな扱いではない。

むしろ、イタリアの総選挙や、ヴェネズエラのチャベスの葬儀のことをトップニュースにしていた。教皇候補者についてのコメントは2面以降、しかも各紙が思い思いの候補者に注目していた。コンクラーベが3月12日に開始ときまった。やはり、私たちは絶妙のタイミングでイタリアにいるらしい。すくなくとも3回はサンピエトロの煙を目撃することになりそうだ。期待に胸は高鳴った。

コンクラーベ開催前夜のローマやバチカン、いつもと変わらぬ巡礼者や観光客で混雑していたものの、それほど興奮している様子はなかった。ただ、サンピエトロ広場周辺に報道カメラの櫓とサーチライト、4台の大型スクリーンが、異質な空気を漂わせていた。サンピエトロ大聖堂を含めバチカンの主要な観光スポットは閉鎖されるだろうとの予想とは裏腹に、すべては通常スケジュールである。バチカン美術館も開館。いつもならシスティーナ礼拝堂の「最後の審判」が最大の見せ場だが、コンクラーベ会場とあって、ここだけがロックアウトされている。私たちは美術館の窓越しにシスティーナの窓を見つめながら、いま世界中が注目している会議場の内部を想像した。ネクロポリス、すなわち、サンピエトロ大聖堂の地下3階にある聖ペトロの墓への入場もキャンセルされることもなく実現した。スイス衛兵たちはいつもと同じように検問所をカラフルな衣装で固めていた。

毎朝、メディアから、コンクラーベ期間中、何時に「煙」があがるかの予想がだされる。ほぼ正午と午後7時2回との慣例がある。3月12日にはじまったコンクラーベの最初の「煙」は同日午後7時である。2時間ほどまえから広場には人が集まりはじめた。最終的には満員時の7割ぐらいの混雑になった。しかし、この日、新教皇選出を告げる「白い煙」があがる確率はほぼゼロである。選挙人の枢機卿たちも、誰が高得票かを第1回は見定めるからである。システィーナ礼拝堂の屋根から煙突が伸びているが、夕闇とともに目視がむずかしくなった。大型スクリーンがありがたい。7時42分、予想より遅れての「黒い煙」に、広場の人々の最初の歓声はすぐのため息にかわった。

3月13日、正午の煙も「黒」であった。バチカン関係者の話でも、あと数日はかかるかもしれないとのこと。私たち一行はその夕方テルミニ駅近くにいた。7時5分。新教皇決定の鐘の音が聞こえはじめた。35人の学生たちはその感動を記録すべく、携帯の録音機能をフル活動させていた。いったい、新教皇として誰がえらばれたのだろうか。それから1時間後の発表まで、ただ想像のみの新教皇の誕生を祝う時間となった。

新教皇は、アルゼンチン出身のホルヘ・マリオ・ベルゴリオ。イエズス会出身の大司教である。教皇名を、史上だれも冠したことのない「フランシスコ」と名乗る。フランシスコとは、13世紀のアッシジの聖者、フランシスコに由来する。この知らせを私たちは、レストランオーナー所有のインターネット実況中継で知った。この枢機卿について、メディアは注目していなかった。76歳の高齢であり、しかも南米、イエズス会とあっては、予想もできなかったのだろう。今回のコンクラーベは、そのサブライズをすべて実現してしまったかのようなようである。ちなみに、イエズス会は16世紀の創立以来、高位聖職者（枢機卿、司教、教皇庁要職）には就任しないという慣例がある。例外はヨーロッパを遠くはなれた宣教地でイエズス会員以外の活動がない場所ではイエズス会出身司教が誕生することは歴史上あった。修道会では、生涯の清貧・貞潔・従順の三つの誓願をなすことが大方の在り方である。イエズス会は、創立者イグナチオ・デ・ロヨラの強い希望で、第4の誓願として「教皇への従順」を加えている。つまり、教皇が直接命じることは何があっても最優先するという誓願である。これは言い換えれば、イエズス会員が教皇になることはありえないことを意味している。イエズス会出身の教皇は創立者イグナチオ・デ・ロヨラにおいては全くの想定外であったにちがいない。

新教皇フランシスコ、すなわちホルヘ・ベルゴリオ師はどのような人物なのか。実は私たちの同僚で、アルゼンチンから日本に宣教師として活動している40代のイエズス会員が3人いる。彼らは皆、母国で養成の期間中、ホルヘ師に直接指導されている。日本のイエズス会員が減少し、将来を憂いた当時の日本管区長ジュゼッペ・ピタウ師（元上智大学長）が、世界各国に有能な若者を日本に派遣し

てほしいと要請した。自らも人員不足に苦しんでいたアルゼンチン管区が、5人もの若い神学生を日本に送った。その責任者が当時アルゼンチン管区長のホルヘ神父だった。ホルヘ師自らも、若き日に日本への宣教を望んだが実現しなかったといういきさつがある。すなわち、この人物は、ヨーロッパだけではなく、世界中、とくに宣教地に心をかけている証拠である。ヨーロッパ中心のカトリック教会、イタリア人の指導する教皇庁、それらの旧秩序を変えてくれる人物として、ホルヘ師には大いに期待がかかっている。今回のコンクラーベの90票以上の投票数（77票が選出最低票）がそのことを物語るように思う。ホルヘ師は南米ばかりでなく、アフリカ、北米、アジア、そしてヨーロッパ中心という反省をもつヨーロッパの枢機卿たちの期待によって選出されたと考えるべきなのだろう。

いまひとつ、新教皇フランシスコへの期待は、「貧しい人々に寄り添う」姿勢である。イエズス会では、1972年の総会議において、「貧しい人々のことを優先して選択する」(preferential option for the poor)の目標を掲げた。「貧しさ」を実際の「貧困」に限る必要はない。貧しい人と「共感」して、ともに「貧しさ」に身を置こうと宣言したわけでもない。むしろ、そうした状態におかれている人に、その意識をもつよう協力し、そこから抜け出す道とともに探るべきであるという意味である。そのためには自身が奢り高ぶりをもち、悔い改めた罪びとのように純粋な心で神の声(心の声)に耳を傾けようとする立場が重要である。悲嘆にくれている人々が笑顔をとりもどし、人生の幸せを感じるように皆で協力する。1960年代から、南米を中心に世界のキリスト教界に大きなインパクトを与えた「解放の神学」の精神はここにあった。ホルヘ神父は、まさにそのことをここ数十年実践してきた。自ら質素な生活を貫くとともに、首都ブエノスアイレスのスラムに教会を建て、足しげく通った。まさに「貧しい人々」が微笑むことができる社会づくりに、自分なりに努力を続けた人物である。「解放の神学」は70年代から80年代にかけ、一部の神学者の急進化がすみ、この運動内でも大きな分裂を生み出した。解放のために、実際の政権を担い、あるいは武装をもってそれを実現しようとした一部の人々に、時の教皇ヨハネ・パウロ2世は「ノー」と言った。福音書のイエスは、政治にかかわらず、武器も取らず、解放を説いた。それゆえに、かれは十字架につけられたのだが、それが普遍的な心の解放につながる神の意志だとキリスト者は信じた。私たちの「解放」も、模範にすべきはイエスの十字架であって、政権や武力による解放とは一線を画すべきだというメッセージである。ホルヘ神父は、ときに保守派といわれるが、実はその流れは、このヨハネ・パウロ2世の路線に重なる。ただ、それが時としてリベラルで革新的ととらえられるのは、ホルヘ師自身が、そうした生き方を、ヒエラルキーの上層ではなく、「貧しい人々」の間で、慎ましく、謙虚に実践してきたからに他ならない。

新教皇フランシスコへの期待は少なくない。とくに、アジアに生きる私としては、新教皇が中国教会との和解にどのような道をつけてくださるのが特に気になるところである。また、現在バチカンには多くの問題を抱えていることは周知の事実だ。フランシスコ教皇の最近の言動が、歴代の教皇のなかでも特に、ヨハネ23世に似てきたと指摘するものがある。76歳という高齢での選出。やさしい言葉で語りかけ、バチカンの華美を嫌うなど。ヨハネ23世は、1963年、第2バチカン公会議を、大方の反対を押し切って招集し、それまで沈黙を余儀なくされた「リベラル派」の人々の発言を促し、公会議を通じて、「世界に開かれた教会」の出発に力を与えた教皇であった。そのヨハネ23世に似ているとすれば、フランシスコ教皇に託された道は一つしかない。「第3バチカン公会議」を招集し、現在の諸問題への解決の道を早急に示すことである。司祭の独身制の問題。女性司祭の可能性。ヨーロッパと世界の関わりの問題など、多くの課題が横たわっている。

世界12億といわれ、そのなかでも南米、アフリカなどに多くの信徒をもつカトリック教会の長として、フランシスコ教皇に託された責任はあまりにも大きい。私たちにできることは、「まず、私のために祈っていただきたい」と就任表明冒頭に語ったこの教皇の言葉のままに、この新教皇の前途の祝福を祈ることだろう。世界中がバチカンの一挙一動に注目しているこの時代だからこそ、その祈りの力が試されるだろう。

(上智大学教授)

文学の中のアメリカ生活誌 (59)

新井 正一郎

Louisiana (ルイジアナ州) 1803年、ジェファソン大統領がフランスから購入した後に13の州となる大領土は、当時はルイジアナと呼ばれていた。この地名は1681年に部下とともに、五大湖からミシシッピ川を南下していたフランスの探検家ラ・サールが、翌年たどり着いたメキシコ湾岸でミシシッピ川全流域を太陽王ルイ14世にちなんで「ルイジアヌ」(フランス語 Louisiane 「ルイのもの」)と命名したことに由来する。帰国したラ・サールからその報告を受けると、国王は強い関心を示し、ラ・サールに400数名の開拓民をつける約束をした。1684年、彼は再度ルイジアヌに向かったが、航路に迷い大河の進入水路を見つけないことができなかった。そのうちに多くの乗組員が亡くなり、ラ・サールも憤激した生き残りの連中に殺された。尤も彼が広大な地域を太陽王に献上したことで、その後フランス人による砦と守備隊駐屯の毛皮交易所が築かれることになった。フランス領ルイジアヌの存在に不安を感じたサウスカロライナ植民地人からのしつような要請により、イギリスは1721年からアメリカの自国領植民地の防衛をめざして幾つかの砦を築き、1733年には軍事的前哨地点としてのジョージア植民地を建設した。ところがフランスはルイジアヌを植民地化するための多額の投資が大した効果をもたらさなかったことから、1763年この王領をスペインに譲渡した。その際植民地はスペイン語風に Luisiana と綴りを変えられた。北東部での英仏間のアメリカ大陸制覇の争いは、多くのアメリカ農民をニューイングランドの丘の農場から西方へ進出させていったけれども、彼等の西進はミシシッピ川の支配権を握っていたニューオーリンズのスペイン人によって妨害されていた。だが1795年のピンクネー条約により、スペインが西部のアメリカ人にミシシッピ川下流の航行権とニューオーリンズ港湾の使用権を承認すると、年々ミシシッピ川を下り、河口付近の旧フランス及びスペインの町であるニューオーリンズへ産物を送る農民の筏や平底船が増えていった。ニューオーリンズは西フロリダや西インド諸島やヨーロッパ諸港向けの物産の供給センターとなり、彼等にとって益々重要なものになった。

事態はボナパルト・ナポレオンの登場で変化する。彼は政権をとると、合衆国の西隣に一大フランス植民帝国を復活させようという野望から、スペインに圧力をかけ1800年10月の密約で前記の割譲したルイジアナという広大な地方を奪回した。この知らせに接した大統領就任直後のジェファソンは心底恐れた。世界最強の軍事国フランスが弱体化していたスペインに代わってミシシッピ川沿いの旧フランス領をその勢力下におくとすれば、航行の自由や積荷を預ける権利を失うだけでなく、自分の夢である「自由のためのアメリカ帝国」が植民地時代の山岳地帯まで後退するかもしれないと思ったからである。1802年10月、彼の神経をさらに尖らす出来事が起こった。スペインのニューオーリンズ総督が、勝手にミシシッピ川とニューオーリンズ港の使用権を取り消してしまったので、西部のアメリカ人は激怒し、ニューオーリンズ攻撃も辞さずと政府に迫ったのだ。ジェファソンは彼等のニューオーリンズ攻撃を思いとどまらせるために、駐フランス公使リビングストンと特別公使としてパリに派遣したモンローに、直ちにナポレオン政府とニューオーリンズおよび西フロリダの買収の交渉に入るように訓令した。彼はフランスが交渉を拒めば、「われわれはイギリスとその艦隊と同盟する」という脅かしの書簡を彼等に持たせた。ナポレオンはさほど驚きはしなかったが、ジェファソンにとって幸運な出来事が生じた。この頃ナポレオンはイギリスとの

戦いの再開を予期し、ルイジアナ占領をしようとしていたが、戦略的に重要な拠点であったカリブ海のフランス領サントドミンゴ島で奴隷たちの反乱が起こり、その混乱を収めるためにフランス遠征軍（この軍は鎮圧後はルイジアナの占領を行うべしという命を受けていた）を送ることが必要となった。しかし全軍が反乱軍との戦闘や風土病で壊滅した。このままイギリスと戦争になれば、ルイジアナはイギリスに奪われてしまうと判断したナポレオンは、アメリカに1,500万ドルでその全地域を売却した。アメリカ領になると Luisiana は Louisiana に改称された。ちなみに、ニューオーリンズ（町名はパトロンの d'Orleans 「オルレアン公」の名に因んで、フランス語で Nouvelle Orleans 「ヌーベル＝オルレアン」と名づけられたことから、1803年にアメリカ領になると、Nouvelle Orleans は英語化されて New Orleans になった）の創建は1718年。創健者はフランス系カナダ人のピアンビル。1796年のこの町の人口は僅か8千人だったが、1818年には3万に膨れあがっていた。

自然のおおらかさに包み込まれ、異国情緒に富んだこの町は19世紀アメリカ文学にも大きな貢献をしている。1848年2月25日から3カ月間、若きホイットマンは地元紙『クレセント』で働くため、この地に3カ月留まった。滞在期間は短かったけれど、この土地との出会いは、彼の中の眠っていた詩人ホイットマンを呼び覚ます一因となった。その30年後の1878年、シンシナティからニューオーリンズに移り住んだラフカディオ・ハーン（日本帰化名・小泉八雲）は、地元紙『タイムズ・デモクラット』の文芸部長職に就くと、もっぱらヨーロッパの文学の翻訳や紹介に熱中していた。1882年、ホイットマンの『草の葉』第7版が出た時、彼は『タイムズ・デモクラット』紙に「草の葉」と題する書評を發表した。「風変わりで、退屈で、空虚な、下品な狂詩集」という冒頭近くの表現から明らかなように、この評には、終始、ホイットマンに対する不満、非難の言葉が投げつけられている。彼によれば、芸術には必ず我々の考えを高め、優れたものを求めさせるものがあるが、この無くてはならないものがホイットマンには欠けている。その意味で彼は芸術家ではない。彼は「趣味の規準、品位の法則を破り、恥知らずなものを造りだすことに終始する、アメリカの自然主義者」だときめつける。その証として、詩群「アダムの子供たち」の中の人体を描いた「私は充電された肉体を歌う」を挙げる。彼の批判的論調はつづく。芸術においては、裸像の完璧さは高尚な主題であるが、ホイットマンの関心を占めているのは、終始「口部の関節」、「上あご」、「膝蓋骨」といったバラバラに解剖された人体の部位だ。ここには人間はハーンが拠点としたような想像力にかかわる問題ではなく、事実依存の存在にほかならないとする意識が働いていることがわかる。この詩に対する不満のもう一つの根拠として、ハーンは「低俗にして醜悪、みだら」なホイットマンの筆つきを指摘している。尤もこの作にも「力、荒々しい美、独創性」が存在する。だが、描き方が「無鉄砲故、この作は大衆の軽蔑と無関心によってしおれ、ぼろぼろに碎けてしまっている。」以上がハーンの論の骨子だ。想像力によって理想的な実在を創造することを求めていたハーンには、ホイットマンは彼が文学でやりたいと思っていたことを全て否定しているように見えたのだろう。

(天理大学名誉教授・天理大学アメリカス学会元会長)

【アメリカス学会第 17 回年次大会・記念講演要旨】

The Personal is History:
わたしの日系人強制収容研究

野崎 京子

戦時日系人収容とその前後の日米間の歴史が、個人の生き方に影響してきた過程を、発表者の私的体験を軸に述べた。発表は、配布資料に沿って 1945 年～2010 年前後の私蔵写真を交えたパワーポイントを使っての講演だったので、以下その発表を段階的に記述する。

Americas Quarterly というジャーナルの存在が示すように、現代合衆国では「アメリカス」という用語が一般的に使われるようになった。かつて北アメリカのみを中心とする思考はラテンアメリカを周辺の視野に入れていたが、ここ数十年間には、日系人の歴史や文化の研究、特に「強制収容」に関しては、多くの新事実や解釈が発表されている。

筆者は『強制収容とアイデンティティ・シフト—日系二世・三世の日本とアメリカ—』（世界思想社 2007）で、収容所と抑留所の両方で監禁生活を強いられた日系二世の父の体験が、公文書書簡で立証されたことを書いた。そもそも、私の日系アメリカ文学・文化研究は、自身の生い立ちにあり、三世としてアメリカに生まれ強制収容所で幼児期を送ったことに起因する。

個人的体験を研究テーマにすることは、大学教員・研究者としてアカデミックではないのでは？と危惧を抱いていた筆者は、The personal is history（個人の言動こそが歴史）という表現に鼓舞されて「強制収容」研究をしてきた。1985 年に異文化関連広報誌に載った 5 歳の収容当時の写真、サンノゼで高校生だった 1958 年と 54 年後の 2012 年、James Lick High School のロゴのある同じ場所での画像など、筆者にとって日系人強制収容研究が個人史と結びついていることを物語っていると思う。

62 年パークレイ校卒業後、日系としての自分のルーツ研究をしてきたが、日系文学との出会いは、それから 15 年もたった日本であった。『カリフォルニア州ヨコハマ町』（トシオ・モリ 大橋吉之輔訳 毎日新聞社 1978）で、筆者が生まれた時代のオークランド市の日系社会の描写に研究的刺激を受けた。

私的体験から出発したこの研究の社会・歴史的

背景として、リドレス運動をあげた。1988 年、レーガン大統領により署名された補償法 HR442 は実行されたのだ。補償法が通過するとすぐに補償事務官からの手紙で、申請書類の受理と国立公文書館や政府の保存資料で調査確認していること、これらに該当する受給資格者が収容者の約半分の 6 万人に及ぶことを知った。私たち家族 4 人（両親、兄、私）は全員資格者であったが、1946 年 1 月、日本到着後半年足らずで事故死した兄は該当せず、両親が 1990 年、筆者は 1992 年、各々 2 万ドルの小切手と大統領からの謝罪の手紙を受け取った。

ホワイト・ハウスのロゴの入ったジョージ・ブッシュ（父）大統領の手紙には、「金額や言葉だけでは失われた年月を取り戻し、痛みを伴う記憶を癒すことはできません。（中略）しかし私たちは、はっきりした正義の立場に立った上で、第二次世界大戦中に重大な不正義が日系米国人に対して行われたことを認めます」と書かれてあった。

アメリカ連邦公文書館として知られる公共機関 NARA に、筆者の家族一人一人の日系人強制収容所（WRA）でのファイルと、さらに父の抑留所（司法省管轄）の国務省ファイルが記録保管されていること、1984 年の情報行為の自由法案（FOIA）で、それらは入手可能であることを知り、着手した。「公文書」には、いったいわれわれについての何が記録されているのか、そしてそれは真実なのかを知りたかったからだ。

入手した書類や写真によって、筆者は長年父がオーラル・ヒストリーとして記録していたものが、公的にも証明されたことを驚きを持って発見したのだった。

太平洋戦争とその時代の狭間で二つの国で生きた父と母の世代と、異なった時代に両国間で生活してきた筆者の世代であるが、各々の立場でその証言や記憶は、あるものは重なり、あるいは交差する。いずれにしても、目撃者としての証言を記録し「歴史の記憶」として留めておくことが次世代への責任であると考えて、日系人強制収容研究を続行し各地で講演している。強制収容、東京ローズ、9.11 などに表れた国家権力の乱用をチェックする機能が我々人民にあるのだという認識を新たにしながら。

（京都産業大学名誉教授）

【研究発表・要旨】

移民と伝道—天理参考館所蔵の 天理教海外伝道資料とペルー移民史料—

梅谷 昭範

天理教二代真柱が1930年に天理大学附属天理参考館（以下、参考館）を創設した趣旨は、天理教の海外布教を志す布教師に展示物を通じて世界の生活文化を学ばせることにあった。当初は海外の民族資料を主な収集対象としていたが、年を追うごとにコレクションの幅が拡大していった。最も新しいカテゴリーとして収集を開始したのは、天理教海外伝道資料である。天理教教祖百年祭（1986年）を機に、移民一世にあたる布教師が健在なうちに、伝道初期の頃の資料を集めよう、というのがその目的であった。

収集活動の対象地域は米国本土、ハワイ、カナダ、ブラジルに限定し、教団の在外拠点と教会のネットワークを活用したフィールドワークを行った。「伝道資料」とは何か、という定義が定まらないままのスタートであったが、布教の過程での「苦労」や「感動」を物語るモノの提供を呼び掛けることによって、収集者と提供者のイメージの共有がスムーズになった。

このように収集した資料は、活動開始から10年後の1996年に「伝道者資料展 アメリカ、カナダ、ブラジルにみる先駆者の足跡」と題した展示会で初公開した。2001年、参考館は現在地への移転を機に、「移民と伝道—日本から南北アメリカ—」コーナーを常設展示に新設した。天理教の海外伝道をメインテーマにした「伝道者資料展」とは趣を変え、日本人の海外移住の歴史全体を意識した展示構成に転換している。現在、参考館における伝道資料の登録件数は1,646件にのぼる。

次に日系移民をテーマとする他館の動向に触れたい。2002年にJICAが横浜に開設した「海外移住資料館」は、「われら新世界に参加す」を基本テーマに、日本人移民を受け入れたホスト国への貢献度に力点を置いた展示を行っている。横浜と共に多くの海外移住者を送り出した神戸では、2009年に「海外移住と文化の交流センター」が開設された。同センターの建物はかつての国立移民収容所であり、この建物自体が収容所の利用経験者にとっては共通の記憶装置になっている。

企画展示というかたちでは、国立歴史民俗博物館が2010年に「アメリカに渡った日本人と戦争の時代」を開催している。同館は日本の現代史の展示を行っている唯一の国立博物館である。一方、2012年に東京藝術大学美術館で開催された「尊厳の美術展—The Art of Gaman—」は、米国スミソニアンからの巡回展である。太平洋戦争中に日系人が抑留中に創作した造形物を「美術品」と位置付けして展示したのは、同展が初めてのことであろう。

このように21世紀に入り、日系移民をテーマとする資料館の新規開設や、企画展示が相次いで見られるようになった。これは、それまで「日本に住む日本人の歴史」とは距離を置かれ、あまり顧みられて来なかった「日系移民の歴史」にスポットライトが当てられ始めたことを意味する。テーマに対するアプローチの方法は主催者によってそれぞれユニークである。参考館の場合は、モノ資料によって天理教の海外伝道の歴史を記録にとどめようというのが立脚点であり、その基本方針は他館と一線を画している。

最後に伝道資料の一例として、『かなりやの唄 ペルー日本人移民 激動の一世紀の物語』の著者である坪居壽美子氏から受贈したペルー移民史料を紹介したい。自らのペルー移住と米国での強制抑留の経験から、家族史の掘り起こし、ペルー日系人社会の歴史の再考、米国強制抑留への問題提起といった研究活動を精力的に行った結果、集約された史料は90点に及ぶ。インタビュー記録、研究ノート、公文書、参考文献などから成る史料群はほぼ全てが製本されている。参考館ではこれらを複写や貸出が可能な登録外資料にして、研究者に積極的な利用を期待しているところである。

天理教の海外伝道と直接関係がないペルー移民史料は、これまでに収集してきた資料と性格を異にするが、天理教海外伝道史を日系移民の歴史の文脈で相対化していく上での試金石となるものである。移民史研究は今後も進展が見込まれる分野であり、その成果は博物館展示にも反映されていくべきだと考える。関連資料を持つ博物館の連携、研究者との情報交換が今後の課題となっていくことであろう。

（天理大学附属天理参考館学芸員）

3 コースの最優秀卒業論文に 「酒本真理子賞」を授与

天理大学アメリカス学会では、去る3月22日の卒業式当日に恒例の「酒本真理子賞」をヨーロッパ・アメリカ学科の英米語、イスパニア語、ブラジルポルトガル語の各コースにおいて選出された最優秀論文執筆者に授与した。授与式は、卒業式式典直後に開かれた上記3コースの各コース教員・卒業生が参列したクラス会の席上挙行され、以下の受賞者3人にそれぞれ賞状と図書カード2万円分の副賞が手渡された。

この「酒本真理子賞」は、1990年3月に天理大学旧外国語学部英米学科を卒業し、1年後に志し半ばにして白血病で亡くなった酒本真理子さんの名前を冠して創設された賞である。彼女の父親の酒本昌彦氏から、「後輩の育成とアメリカス学会の出版活動に役立ていただきたい」と毎年寄付を頂戴しているが、その一部を「酒本真理子賞」として毎年卒業式当日に授与している。

英米語コース：乾 拓也

“A Linguistic Study of the Early Modern English:
Focused on Shakespeare’s English” [英語論文]
〔初期近代英語の言語学的研究—シェークスピア英語を中心として—〕

イスパニア語コース：鷲島哲治

「新たなコミュニタス創造—サンティアゴの地域祭りから見る祭りと社会—」

ブラジルポルトガル語コース：菅原裕生

「ブラジルのサッカー—欧州トップリーグから観るカンピオナト・ブラジレイロ—」

アメリカス学会の活動

◇定例研究会：7月20日（土）

天理大学アメリカス学会の2013年度定例研究会は、7月20日（土）午後2時から天理大学研究棟3階の第2会議室にて開催予定。研究発表予定者および発表タイトルは以下の通り。

山倉明弘（天理大学国際学部教授）：「米国統治大変革としてのニューディール」。

野口 茂（天理大学国際学部准教授）：「ベネズエラ・チャベス大統領の死をめぐって（仮題）」。

◇第17回年次大会を昨年11月24日に開催
新会長に矢持善和氏が就任

恒例の第17回天理大学アメリカス学会年次大会は、昨年11月24日に天理大学研究棟第1会議室で開催され、年次大会に先立つ会員総会において、元会長片倉充造氏の退任に伴う新会長の選出が行われ、矢持善和氏（国際学部地域文化学科教授）が新会長に就任した。また、新会長の就任に伴い、副会長に山倉明弘氏と木下民生氏が選出された。年次大会においては、京都産業大学名誉教授の野崎京子氏が、「ザ パーソナルイズ ヒストリー—わたしの日系人強制収容研究—」と題して記念講演を行った。また、天理大学附属天理参考館学芸員の梅谷昭範氏が、「移民と伝道—天理参考館所蔵の天理教海外伝道資料とペルー移民史料—」と題して研究発表をした。記念講演と研究発表の要旨は、このニューズレター6～7頁に掲載している。

編集後記

☆天理大学アメリカス学会の2013年会計年度は、昨年11月24日に開催の年次大会当日にスタートしました。2013年度の年会費（一般会員：5,000円、賛助会員：1口30,000円）を未納の会員の皆様は、昨年12月にお届けした『アメリカス研究』第17号に同封しました郵便振込取扱票にて指定口座（下記参照）宛にお振り込みくださいますよう、よろしくお願い致します。郵便振込取扱票を紛失された方も下記の郵便振込口座番号宛にてお願いします。

口座番号：00900-5-70364

加入者名：天理大学アメリカス学会

天理大学アメリカス学会に関するお問い合わせは下記へお寄せください。

天理大学アメリカス学会ニューズレター

(No. 68 : 2013年5月14日発行)

発行者：矢持善和

〒632-8510 天理市杣之内町1050

天理大学アメリカス学会

電話：0743-63-9076

Fax：0743-62-1965

e-mail: tuaas@sta.tenri-u.ac.jp

http://www.tenri-u.ac.jp/tngai/americas/